

朝鮮時代の慶尚道における邑城の構成原理に関する研究*

A Study on the principle of Construction of Up-sung
at Kyungsang-Do in the Chosun Dynasty *

金暎完**・仲間浩一***

By Kyungwan KIM**・Koichi NAKAMA***

1. 研究の目的と位置付け

邑城(upsung=城郭)の起源は、中国の夏王朝期に私有財産を保護するために形成されたものである。殷王朝になるとその形態が確立され、隋・唐王朝になると邑城形式が整形化されたと言われている。¹⁾

韓国での邑城の起源は確実ではないが、韓国の三国時代(高句麗・百濟・新羅)、邑城は地方の中心地にあった文化・行政・経済・軍事の中心である城郭を示す概念であると考えられる。²⁾

統一新羅時代には、9州5小京が地方の中心になっており、王京の都市計画は唐の長安城をモデルに採択し、秩序精鍊な坊里で区画されていた。邑城は、その機能が都市を防御する目的と保民用に使用するために築造されたもので、中国式邑城に近似した城郭と言える。³⁾

一方、高麗と朝鮮時代を経て築造された邑城は、ほかの時代と異なり邑城と山城の区分が明確であり、当時の各地方の文化・行政・経済・軍事の中心地として、当時の社会制度、知識層と支配層の思想が邑城の空間構成に強く作用している。

現在、その痕跡が確認できる邑城は、高麗時代後期から朝鮮時代に築造されたもので、当時の各地方の地域性をもっている。

これまでの韓国の邑城に関する先行研究は、大きく邑城の歴史に関する研究、地方都市(邑城)全般に関する研究、個別的な地方都市(邑城)に関する

*キーワード：邑城、空間計画、都市計画、都市構成

**外国人員、工修、九州工業大学工学研究科

(福岡県北九州市戸畠区仙水町1-1,
TEL:090-9725-4647, E-mail:comboys70@yahoo.co.jp)

***正員、工博、九州工業大学工学研究科

(福岡県北九州市戸畠区仙水町1-1, FAX:093-884-
3100, E-mail:knakama@civil.kyutech.ac.jp)

る研究、邑城内部の施設に関する研究の四つに分けることができる。

邑城の歴史に関する研究には、朴泰祐³⁾・李愚鐘⁴⁾・車勇杰⁵⁾などの研究がある。

地方都市(邑城)全般に関する研究としては、李相球⁶⁾・白寅吉⁷⁾・朴帝用⁸⁾・金哲洙⁹⁾・崔童植¹⁰⁾などの研究がある。

個別的な地方都市(邑城)に関する研究には、沈正輔²⁾・芮明海¹¹⁾・金暎完¹²⁾などの研究がある。

邑城内部の施設に関する研究としては、姜圭政¹¹⁾・李達勲¹³⁾・金童植¹⁴⁾などの研究がある。

本研究は、先行研究の結果を踏まえて、慶尚道を対象とし、邑城の都市構成原理を明らかにすることが目的である。

2. 研究の対象と方法

(1) 研究の対象



図-1 慶尚道の位置(筆者作成)

慶尚道は、現在の慶尚南道と慶尚北道を合わせたもので、図-1のように韓国の東南に位置している。この慶尚道は、朝鮮時代の知識層・支配層が多かった地域である。

慶尚道は、風水が韓国に伝来される以前の新羅時代に形成された都市が多い地域で、新羅の政治と文化の中心でもあった。高麗時代の1314年に慶尚道となり、朝鮮時代においてもそのままの名称を使用した。

(2) 研究の範囲と方法

朝鮮時代の地理誌の中で最も古い本である「慶尚道地理誌（1425年）」は、「新撰八道地理誌（1432年）」を作成する過程で誕生したもので、慶尚道に関する最初の地理誌である。

中央政府が実施した全国的な地理誌編纂以外に、地方官吏が中心になって各邑毎に邑誌の編纂も行われた。朝鮮後期、慶尚道地方における、これらの邑誌を合わせて編纂したのが「慶尚道邑誌」である。

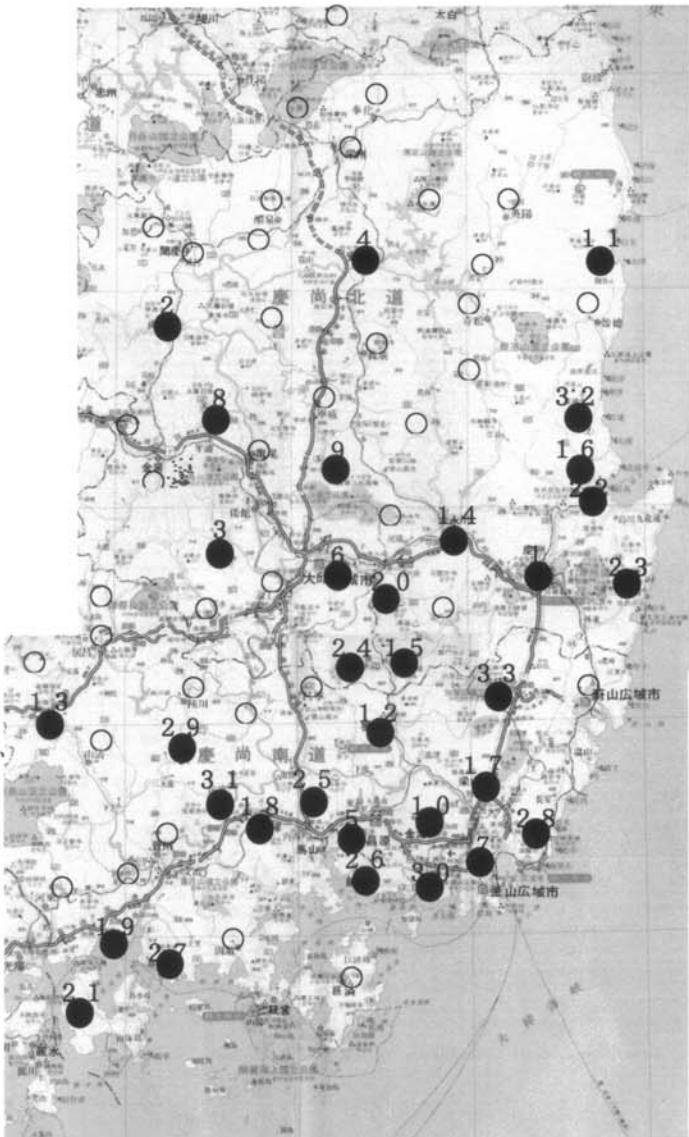
本研究では、「慶尚道邑誌」が他の地理誌より山川・官衙・郷校・祭祀施設・隣接邑名について、詳細に記載されていることから「慶尚道邑誌」を主な資料として用いることとした。その他に、新增東国輿地勝覽¹⁷⁾と輿地図書¹⁸⁾を参考資料とした。

3. 邑城の立地特性

慶尚道地域における邑城の分布状態を調べるために、全国的に分布された邑城の状態が記録されている文献を参照し、行政単位別の分布状態と立地を確認して示したのが表-1である。

表-1 道別の邑城の分布数

道名	新增東国輿地勝覽	輿地図書	慶尚道邑誌
咸鏡道	17	16	
平安道	12	14	
黄海道	8	4	
江原道	9	0	
京畿道	1	3	
忠清道	17	13	
全羅道	30	19	
慶尚道	33	35	33個
合計	127個	104個	



●：邑城がある都市、○：邑城がない都市

図-2 慶尚道の邑城位置（地図を元に筆者作成）

表-1に示したように、道別邑城の分布状態を見ると「新增東国輿地勝覽」（1530年）には、127個の邑城が記録されており、「輿地図書」（1765年）には104個が記録されている。このように各文献から見られる邑城の数が異なるのは、各文献が編纂された時期が異なるためである。戦乱による邑城の破壊と新築、邑治の移転によって邑城がなくなる場合などがあったと推測される。

次に分布を見ると、国境地域である咸鏡道・平安道・全羅道・慶尚道に約80%の邑城が存在することがわかる。これは、邑城が軍事的な役割を果たしていることを示していると推測される。表-1に示したように慶尚道は、道別分布数を見ると全国で一番多い邑城が存在していたことをわかる。

4. 邑城の都市構成

邑城には、いろんな施設が配置されている。その中には、ある規範に従って配置されたと思われる施設がある。

先行研究の姜圭歎、李相球、金哲洙などによると‘客舎’が、邑城の施設の中で一番重要であることがわかる。「慶尚道邑誌」の方向と距離の記述は大抵、客舎のものが中心である。

(1) 邑城の形態

李相球の研究で用いると邑城の門を分類することができる。慶尚道では、6種類に分類することができた。

分類の結果、邑城にある城門は、東西南北の四つの門をもつのが多いことが判明した。また、邑城の規模が大きいところは四つの門をもつ傾向も見られた。邑城の規模が小さいところは、門が二つしかない場合もある。

邑城の形態も、「慶尚道邑誌」を元に判断を行った。結果、邑城の平面形態を大きく円型・方型・非対称の三つに分類できる。

表一2 門のパターン分類

(李相球の研究を基に筆者作成)

門の数	門の方向	邑城の数	タイプ
4	東西南北	15	I
	東西 北	2	II-1
	東西南	4	II-2
3	東 南北	2	II-3
	南北	1	III-1
2	東西	2	III-2
合計		26	

円型は、邑城が風水地理説の影響を受けたことを示しており、方型は中国邑城の影響を受けたことを示している。¹¹⁾ 慶尚道からは、半分程度(16邑)の邑城から円型が確認された。これにより、朝鮮後期の慶尚道地域には風水地理説の影響があったと推測される。

(2) 教育施設

朝鮮時代の教育制度として、ソウルの成均館と四学、地方都市の郷校がある。郷校は一つの邑に一つず

つ設立されており、儒学の配置規範に従って、儒学の理論である考工記による左祖右社・面朝後市の基本法則が適用されていた。孔子などの儒学者を祭るための文廟が設置されていることから、邑の東に位置するのが一般的である。しかし、慶尚道には東ではなく北の方面に多く見られるが、これは朝鮮後期の儒学の規範より、風水地理説の影響を受けたためである¹²⁾との説がある。

(3) 祭祀施設

祭祀施設には、社稷壇・文廟・成隍壇・厲壇などがある。

社稷壇とは、王朝の象徴物として祭壇を設置し、邑の西の方面に設置した。慶尚道には、漆谷・泗川・密陽・機張、四つの邑以外には西に設置されている。

文廟は、孔子などの儒学者を祭るところで、中央には成均館、地方には郷校にあった。考工記によると邑の東に配置するのが基本である。

成隍壇は、成隍神を祭祀する施設である。成隍神とは、邑の守護神で「国都州府郡縣鎮山」の神を言うことである。成隍壇は邑または町の鎮山に位置しているか、もしくは厲壇がある北を避けて東西南にあると言われている。¹³⁾ これは、民間信仰の影響であると考えられる。

しかし、「慶尚道邑誌」を調べた結果、鎮山に位置していない邑や、北に位置している邑が存在した。

厲壇は、祭祀をしてくれる人がいない魂を祭祀する施設で邑の北にあることが基本である。漆谷(南)・慶山(東)・泗川(南)以外は北に位置している。これらも民間信仰の影響であると考えられる。

先農壇は、農事に関連する祭祀を行う施設である。これは慶州と安東の二邑しか存在しないことがわかった。

(4) 商業施設

朝鮮時代の地方都市における商業は、ほとんど定期市である場市(Chang-Si)に依存していた。

場市とは、一定な場所で商人と住民が集まって交易を行うところである。邑には一つ以上の市場が存在した。

慶尚道における市場は、邑の規模が大きくなると数も増える傾向があることが判明した。

5. 結論

「慶尚道邑誌」を中心に、「新增東国輿地勝覽」と「輿地図書」を参考資料とし、慶尚道における邑城の立地特性と空間構造に関して調べた。

結果を、要約すると次の通りである。

1) 国境地域である咸鏡道・平安道・全羅道・慶尚道に約80%の邑城が存在することがわかる。これは、邑城が軍事的な役割を果たしていることを示していると推測される。

2) 邑城にある城門は、東西南北の四つの門をもつのが多いことが判明した。また、邑城の規模が大きいところは四つの門をもつ傾向も見られた。

3) 慶尚道からは、半分程度（16邑）の邑城から円型が確認された。これにより、朝鮮後期の慶尚道地域には風水地理説の影響があったと推測される。

4) 慶尚道からは、郷校の位置が北の方面に多く見られる。これは朝鮮後期になると儒学の規範より、風水地理説の影響を受けたと推測する。

5) 社稷壇は、慶尚道では、漆谷・泗川・密陽・機張、四つの邑以外には西に設置されている。

6) 成隍壇、慶尚道では鎮山に位置していない邑と、北に位置している邑が存在した。

7) 虧壇は、漆谷・慶山・泗川の以外は北に位置している。民間信仰の影響であると考えられる

8) 慶尚道における市場は、邑の規模が大きくなると数も増える傾向がある。

以上により、慶尚道における邑城の空間配置は、風水地理と儒学の理論である考工記による左祖右社・面朝後市的基本法則が適用されていることが確認された。

参考文献

- 1) 姜圭歎、邑城の公共施設配置規範に関する研究－忠南地方の14個邑城を中心に－、大田大大学院修士論文、2000
- 2) 沈正輔、韓国邑城の研究、学研文化社、1995
- 3) 朴泰祐、統一新羅時代の地方都市に対する研究、忠南大学大学院修士論文、1987
- 4) 李愚鐘、中国と韓国の都城の計画原理と空間構造の比較に関する研究、大韓建築学会論文集、1994
- 5) 車勇杰、高麗末・朝鮮前期対倭関防史研究、忠南大学大学院博士論文、1988
- 6) 李相球、朝鮮中期邑城に関する研究、ソウル大大学院修士論文、1989
- 7) 白寅吉、朝鮮時代邑城の立地による特性に関する研究、ソウル大大学院修士論文、1989
- 8) 朴帝用、風水地理説の思想的背景と都市形成の影響に関する研究、1989
- 9) 金哲洙、韓国城郭の形成、発展過程と空間構造に関する研究、弘益大大学院博士論文、1984
- 10) 崔童植、絵図描寫に見る李朝期全羅道の城郭都市の立地及び城郭形態に関する風水地理的研究－実測地形図との比較－、日本都市計画学会・都市計画228、2000. 11
- 11) 芮明海、鮮時時代の空間構成に関する研究、大韓建築学会論文集計画系18卷7号、2002. 7
- 12) 金暎完、朝鮮時代の風水からみた町の空間認識と対応方式に関する研究、土木計画学研究論文集 Vol. 21 no. 2、2004. 9
- 13) 李達勲、朝鮮時代郷校建築の様式に関する研究、大田大産業技術研究所、1999
- 14) 金童植、清州邑城官衙公庁の規模と位置に関する研究、清州大大学院修士論、1999
- 15) 慶尚道邑誌（1823年）、亜細亜文化社、1982
- 17) 韓国学文献研究所：新增東国輿地勝覽（1530年）、亜細亜文化社、1983
- 18) 輿地図書（1765年）、国史編纂委員会、1979